
山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより第189号(通巻第256号)

2020年11月30日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail:jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/>

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラムに関するお知らせは、改変しない限り、自由に複写、配布していただいても結構です。

■令和2年度「第3回連携・教育研究会」の報告

山梨大学教育学部（附属教育実践総合センター）と山梨県教育委員会（山梨県総合教育センター）がそれぞれの強みを活かして連携し、双方の成果をあげることを目的として行っている連携・教育研究会ですが、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全体での研究会は、これまで開催できておりませんでした。未だ感染の危機は去っておりませんが、本研究会の目的を少しでも達成するために、「会場の収容人数の1/3程度の人数での実施」「全員のマスクの着用」「会場入口でのアルコールによる手指消毒」「各自の検温」「講演や挨拶をする人の前にシールドを設置し、飛沫の飛散を防ぐ」「休憩時間を適宜取り入れ、会場の換気を行う」など、感染症対策を講じる中で、令和2年11月19日（木）に山梨県総合教育センターにおいて第3回連携・教育研究会を開催することができました。本センターからは16名が参加しました

第3回は、例年、山梨大学からの情報提供という趣旨で実施されてきましたが、今年度は、本教育実践総合センターの川本静香先生に「コロナ禍における自殺予防」と題して講演をしていただきました。

まず、自殺予防の基礎として、日本における自殺の実態や年代別の数、自殺の原因や自殺総合対策について学びました。続いて、自殺の予防について「心理学的剖検研究からわかったこと」として、問題別の特徴を踏まえた類型、また早期発見のための視点について学ぶことができました。さらに、教育の現場に限らず「自殺」ということに触れてはならないような風潮があるが、むしろ関心をもってその気持ちを聞くことの重要性や、「死にたい」と訴えた時の対応として「死んではいけない」という教えを説いたり、「死め気があれば何でもできる」というような安易な励ましをしたりしがちであるが、逆効果であることが多いことなど、具体的な関わり方について学ぶことができました。



田中 勝 センター長



川本 静香 講師

川本先生のご講演からは、「死にたいほどつらいことがある、逃れたいことがある」という内面を理解すること、「死にたい」と言われたら、期間や頻度、計画性などの「危険性の評価」をすることの重要性などについても学ぶことができ、大変有意義な学習の場となりました。

私たちは、様々な人とのかかわりの中で生きています。人と関わることがストレスとなり「辛い」「逃れたい」と感じることもあるように思います。しかし、その「辛さ」に寄り添ったり、やわらげたりできるのも、また人なのだと思います。相手の思いに寄り添えることのできる人でありたいと深く考える機会となりました。

講演終了後、山梨県総合教育センターが研究協力校を指定し行っている研究について、4つのグループ「①授業・学校づくり」「②情報教育」「③教育相談」「④特別支援教育」、5分科会に分かれて、これまでの研究の成果についての共有や、課題解決に向けた協議が行われました。どの分科会においても、現代の教育課題解決に向けた研究が順調に進み、その成果が確認されました。



■「子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会」 峡東地区と峡南地区で開催されました

当初6月に実施が予定されていましたが、コロナ禍のため延期となった峡東地区と峡南地区での研修会が、それぞれ11月12日（木）、11月26日（木）に実施されました。

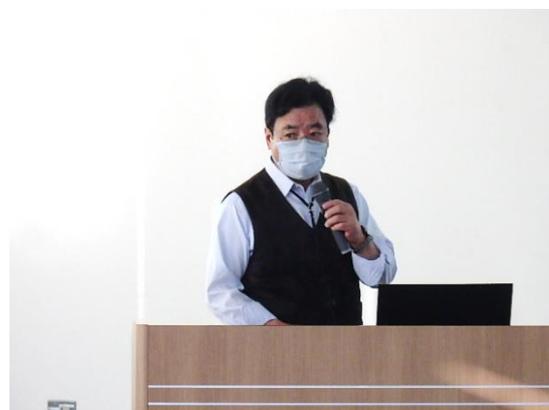
11月12日の峡東地区では、若手からベテランまで幅広い年代の教員20名（内訳：小8名、中3名、高8名、その他1名）が参加し、充実した研修会を行うことができました。山梨大学からも7名の教員が参加しました。

11月26日（木）の峡南地区では、22名（内訳：小15名、中6名、その他1名）が、研修を受講しました。山梨大学からも7名の教員が参加しました。

いずれも三密を避けるため参加者の人数を絞っての実施となりましたが、内容の濃い有意義な研修会となりました。

まず初めに、一昨年度まで山梨大学の理事・副学長であった堀哲夫先生から、OPPA論の概要説明がありました。堀先生は、OPPAの開発者であり、全国的にOPPAの普及に尽力されてきました。教師に加え、学習者が自分自身の変容を把握するためにOPPシートが重要な役割を果たすことなどを、わかりやすく説明していただきました。正に評価の本質は何かを考えさせられるお話でした。

続いて、法政大学理工学部兼任講師、武蔵野市立第五中学校非常勤講師の辻本昭彦先生からは、まず、ダイヤモンドランキングを使って、評価について一人一人が考える活動がありました。また、OPPシートを使った多くの実践をお話いただき子供たちの発想の豊かさに気づくことができました。



堀 哲夫 講師

最後に、生徒や学生が実際に、目を輝かせて楽しそうに授業に取り組んでいる様子を、動画を通して紹介していただきました。

研修会後に参加者をお願いしたアンケートでは、この研修会を通して評価や授業に対する考え方が変わったという感想が多く寄せられました。以下にその一部を紹介します。

●参加者からの感想

- 自分自身の指導改善に生かしていくという視点が大切だと思いました。生徒の変容だけでなく教師の変容も大切。（高校 教職経験 27 年目）
- OPPI は授業者自身の指導改善に有効だという考えが大きかったが、児童が主体的に学んでいくために重要だということに気づくことができた。（小学校 教職経験 5 年目）
- 二人の講義を聞き、改めて生徒の成長を引き出すためには教師が日々勉強して進化していく必要があることを痛感しました。
まだまだだね。何歳になっても。（高校 教職経験 36 年目）
- 評価は何のためにあるのか、どんな時にすると効果的なのかを学ぶことができました。受講前に比べてより具体的に私がすべきことが分かった気がします。
そして、OPPI に取り組み、子供たちのためになる楽しい授業をしたいという気持ちが高まりました。（小学校 教職経験 3 年目）
- 評価に対する考え方が変わりました。評価はしなければならないものではなく一人一人の成長のためには必要不可欠であると感じました（中学校 教職経験 23 年目）
- 改めて OPPI の有効性に気づきました。昨年受講させて頂きすでに OPPI を取り入れ教科全員で取り組んでいますが、本質的な問いについての学習前と学習後の答えを書かせていなかったので改善したいと思いました。（高校 教職経験 24 年目）
- 受講前、教師は子供にしてあげることが多かったが、この授業を通して学びは子供自身が自覚していくことが一番大切だと感じた。やはり主体が子供であって自分自身で学びを作っていくことだと気付かされた。（小学校 教職経験 14 年目）



辻本 昭彦 講師



■日本教育大学協会全国教育実習研究部門

第 34 回研究協議会（オンライン）参加報告

令和 2 年 10 月 9 日（金），オンラインにより開催された「日本教育大学協会全国教育実習研究部門 第 34 回研究協議会」に本学から青柳達也特任教授，小山勝弘教授，成田雅博准教授，中込繁樹准教授の 4 名が参加しました。この総会・研究協議会は，教育実習の管理・運営について各大学の情報交換をもとに，共通問題の把握と解決，そして各大学独自の方策の確立をめざし，年 1 回開催されています。今年度は感染症拡大防止対策として，オンラインでの開催となりました。そのため令和元年度の会計報告等は事前の文書提案で行われました。また，研究協議会では，3 つの研究発表について質疑応答及び協議が行われました。その後の総合協議では「新型コロナウイルス禍での教育実習」をテーマに，はじめに小グループで，その後全体で情報交換を行いました。新型コロナウイルス禍での教育実習の対応にかかわって各校から多くの示唆を得ることができました。研究協議会の内容については，次の通りです。

【研究発表】

- 発表①宇都宮大学「学校ボランティアの単位化を含めた教育実習改革の効果検証-学生の意識と達成目標に基づく評価の変容-」
- ②東京学芸大学「コロナ禍における教育実習の運営～東京学芸大学の実践を例に～」
- ③横浜国立大学「遠隔教育実習を見据えた事前指導とオンライン授業教材作成の実践報告」

【総合協議】

- 「新型コロナウイルス禍での教育実習」をテーマに情報交換及び対応の協議

これまでのセンターだよりの一部は， <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/> で見ることができます。